

〔舞台劇脚本〕

JOHANN ～ヨハン・シュトラウスII世の生涯～

Johann ～The Life and Death of Strauss II～

狩 谷 新

Kariya Shin

プロローグ 1907年10月22日 ウィーン中央墓地

音楽家の区画前。

大量の楽譜を積み上げ、火をつけるエドゥアルト・シュトラウス (72)。

下手からアデーレ (51)。

アデーレ「エディ、あなた本当に！」

エディ「御覧の通りだよ。姉さん。僕はヨーゼフ兄さんと約束したんだ。どちらかが生き残って、音楽活動をやめる時には、あらゆるオーケストラ用の楽譜や資料が他人の手に渡ることを防ぐために破棄するってね」

アデーレ「本当にそれだけ？それなら、わざわざヨハンのお墓の前で燃やさなくても」

エディ「ワルツ王、ウィーンの太陽、もう一人の皇帝…。19歳でデビュー、50周年を世界中が祝い、死んでからも新作が披露された偉大な男。姉さん、生涯で500曲に及ぶ作品を残した兄さんを文字通り陰から支えてたのが、誰だか知らないわけじゃないだろう？」

アデーレ「もちろんよ。ヨーゼフやあなたが、どんなにあの人に尽くしてきたか…。でも、あの人自身がそれを望んでいたわけじゃないの」

エディ「独りよがりのあの男以外の誰が…！」

アデーレ「エディ、あなたが偉大な兄を持ったことと同じ重荷をヨハンも背負っていたの」

エディ「！」

アデーレ「この国で、ワルツという音楽を最初に広めたのはお兄様じゃないわ」

エディ「親父のことを言ってるのか？」

アデーレ「そう、そして、もう一人。最初は同じ楽団にいたヨーゼフ・ランナー」

エディ「二人が競うように新曲を生み出してたのは知ってるさ」

アデーレ「1843年、ランナーが亡くなって、お父様一人が残ったの」

エディ「その翌年に、兄さんがデビューして、フランツ・ヴィーストが例の言葉を書いたんだ」

アデーレ「さようなら、ランナー、お疲れ様、シュトラウスのお父さん、こんにちは、シュトラウスの息子さん」

エディ「兄さんの栄光の始まりだ」

アデーレ「振り返ってみれば、確かにそうね。でも、あの時、お兄様は、追いつめられてたの」

エディ「誰に？」

アデーレ「強いて言えば、お母様だわ。末っ子のあなたを含めて、男の子が3人、女の子が二人、愛人の家に入り浸っていたお父様からは殆ど見捨てられてたお母様は、一家を守るためにお兄様をデビューさせたの」

エディ「そのために、兄さんに音楽を？」

アデーレ「お父様の反対を押し切って、教師を見つけ、基礎から音楽を学ばせたの。お兄様が最初に曲を作ったのは7歳の時、お母様が譜面を起こしたのよ」

エディ「でも僕が生まれたのは、その3年も後だ」

アデーレ「夫婦のことは、本人たちにしかわからないわ。そもそも、お父様が結婚したのも、お母様がヨハンを身ごもったからなんですから」

エディ「仕方なく結婚したって？」

アデーレ「わからない。でも、お父様は、1833年から、19歳のエミーリエと恋仲になって、あなたの生まれた二か月後には、長女を産ませて、その後、7人も子供を作ってる」

エディ「その復讐のために兄さんを…」

アデーレ「お父様があなたたちを音楽から遠ざけようとしていたのは事実よ。でもそれは、必ずしもあなたたちを憎んでいたからではないの」

エディ「音楽を続けてたのは、ヨハン兄さんだけだ。ヨーゼフは、技師を目指してたし、僕は外交官になりたかったんだ」

アデーレ「お父様は、起きてすぐに新曲を考え、楽団を仕切って、夜は遅くまで演奏会、という辛い音楽家の生活を息子たちに継がせようとは思っていなかったの」

エディ「それを、母さんが…」

アデーレ「ヨハンの才能を最初に見抜いたのもお母様だったわ。その才能を伸ばすことで、お父様との対決を仕組んだの」

エディ「兄さんは、操られてた？」

アデーレ「とても上手にね。お母様は、ヨハンにヨーゼフ・ドレクスラーから音楽理論を学ばせ、宮廷歌劇場のヴァイオリニスト、アントン・コールマンから演奏の手ほどきを受けさせたの」

エディ「親父を越える手段だったってことか」

アデーレ「そう。そして、19歳の息子に監督官庁宛に手紙を書かせたの」

上手、スポットに19歳のヨハン登場。

ヨハン「私は、15名程度の団員からなるオーケストラを率いて、レストランなどで音楽演奏いたしたく思います。私は、これまで良風美俗にもとる行ないをしたことはなく、一度として警察当局とトラブルを起こしたことはありません」

スポット消える。

アデーレ「そして、1844年8月10日、お母様は離婚の手続きを申請するの」

エディ「兄さんは父親に捨てられた家族を救うために、楽団を率いたってことになった」

アデーレ「そう。そして、お母様の思惑通り、ヨハンは高い評価を受けて、世間の喜ぶ親子対決が始まったの」

暗転。

センタースポットにヨハン。

ヨハン「お父様。かけがえのない父上と比べると意思の点でもまだまだ足元に及ばないということが息子にはわかっております。また、これまで受けた御恩に背くことになりはしないかと悩んでもいます。しかし、本当に正しいこと、本当に高潔なことのみに選択しようと決心いたしました。全身全霊をこめて私と母の将来のために道を切り拓きます。この私のわずかながらの才能を伸ばしてくれたのは、母の力です。

母の不幸な状況を改善できるのは父上しかおりませんが、少なくとも私は後ろ盾となり、微力ながらも自分の職業に従事して母に表したいと思っています。たとえかけがえのない父上であっても、また他のどんな人であっても、私が母の側につくという強い決意を覆すことはできないでしょう。父上を心から尊敬してやまない息子、ヨハン・シュトラウス」

ワルツ 記念の歌 Sinngedichte

タイトル JOHANN ～ヨハン・シュトラウス二世の生涯～

第一幕 第一場 1845年 7月6日 シュトラウス家 ヨハン19歳

立ち机で作曲しているヨハンのところへ母アンナ（43）がやってくる。

アンナ「ヨハン、父さんが生きている限り、同じお客を相手にしてはダメなことはわかったわね」

ヨハン「ドイツ系はあきらめるってことだね」

アンナ「そうよ。ウィーンにいるのはドイツの人ばかりじゃないわ。チェコ、セルビア、スラブ系もラテン系もヨーロッパ中から人が集まっているの」

ヨハン「昨日の舞踏会でチェコ・ポルカを頼まれたんだ」

アンナ「スラブ人の舞踏会からも依頼が来てるわ。彼らにとって、ワルツは初めて聞く音楽よ。父さんが、見逃してるお客様なの」

ヨハン「それに彼ら独自の旋律も勉強できるんだ。それをアレンジすれば、新しいものが生まれる」

アンナ「ヨハン、それこそ、あなたの強み。基礎のない父さんには、できないことだわ」

ヨハン「父さんは、フランスやイギリスに行くみたいだね」

アンナ「あなたは東よ。ドナウ川を下って、新たな領地を切り拓くの」

ヨハン「わかってる。でも最近、ドイツ系の観客も僕を認めてくれるようになってるんだ」

アンナ「メッテルニッヒは弾圧を長く続けすぎたんだわ」

ヨハン「どこかでエネルギーがたまってきてるんだ」

第一幕 第二場 1848年3月13日 議事堂前 ヨハン 23歳

決起した民衆が、激しいダンスで革命を表現。

最期にヨハンがラ・マルセイエーズを指揮して終わる。

幕間①

アデーレとエディ登場。

エディ「革命騒ぎの時、僕は、母さんと修道院に避難していたんだ」

アデーレ「あなた、だいぶ若返ってない？」

エディ「そういうあなたもすっかり若返って」

アデーレ「それはほら、女の子だし、ほんとはまだ19だし」

エディ「あれを言ったら私だって」

アデーレ「あなたは男でしょ」

エディ「でも幕の間でたびたび爺さん、婆さんが出てくるのもなんだから」

アデーレ「というわけで、ここからは、シュトラウス家の末の弟エドゥアルトと三番目に
して最後の妻である私、アデーレは、若い姿で登場しますので」

二人「どうぞよろしく」

アデーレ「それで、革命は、メッテルニッヒを追放したんだけど、結局有能な指導者が現
れず、8月にイタリアで革命を鎮圧したラデッキー將軍を称えた行進曲をお父様が作
曲して、喝さいを浴びたわ」

♪ ラデッキー行進曲

エディ「親父は革命軍を支持してたんじゃないのか？」

アデーレ「お父様もお兄様も市民として参加してたんだけど、最後まで積極的だった労働
者とは一線を画してたの」

エディ「でもこの時、革命とかかわったことが兄貴のくびきになった」

アデーレ「実際にはお父様の方が革命軍を支持していたんだけど、うまく身をかかわしたの」

エディ「そして、新皇帝が即位した」

アデーレ「フランツ・ヨーゼフ1世、わずか18歳の皇帝には大きな期待が寄せられたの」

エディ「でも彼は戒厳令をしいて、革命の後始末を始めてしまった」

アデーレ「お父様はこの時、ロンドンへ演奏旅行に出かけ、そこで、メッテルニッヒに会っ
てるわ」

エディ「亡命してたんだな」

アデーレ「明らかに一つの時代が終わったの。お父様は、ロンドンから帰ると愛人の子供
の一人がかかっていたしょう紅熱をうつされて、あっさりと亡くなってしまったの」

エディ「まだ45だった」

アデーレ「お兄様はたった一人のヨハン・シュトラウスになった。そして、新皇帝にいち
早く敬意を表したの」

♪ Kaiser Franz Joseph marsch

第二幕 第一場 1852年 ホーンブルグ宮殿 ヨハン 27歳

メッテルニッヒ (79) とフランツ・ヨーゼフ1世 (22)

フランツ「昨日の夜、宮廷舞踏会で指揮していたのが、シュトラウスなんだな」

メッテルニッヒ「その通りです。陛下」

フランツ「宮廷舞踏会音楽監督にしては、若かったようだが」

メッテルニッヒ「それは彼の父親で、昨晚指揮したのは、息子の方です」

フランツ「同じ名前の息子というわけか。メッテルニッヒ、確か、君は、父親も知っているとか？」

メッテルニッヒ「ヨーゼフ・ランナーと二人で、ワルツ合戦を繰り返した人気者でしたから、亡命先のロンドンで、彼の指揮で演奏を聴いたこともあります」

フランツ「ワルツ…か。君が指揮したウィーン会議以来、様々なことがあったが、この国はまだ踊り続けているようだな」

メッテルニッヒ「我ら貴族が、覇権を競い、国の存亡をかけて、争っている間、民衆はそれをあざ笑うように踊っていた…ということでしょうな」

フランツ「君を追い出した革命の頃もかな？」

メッテルニッヒ「あれもこの国では踊りの続きのようなものです。新たに台頭した市民という階級が目指したのは、結局、我ら貴族のような生活でした。その証拠にあなたは、君主として、彼らに熱狂的に迎えられた」

フランツ「フランツ・ヨーゼフというご先祖の英雄の名を二つももらったからな」

メッテルニッヒ「いつの世でも人が望むのは、不安のない未来と享樂的な日常でございます。それを自ら勝ち取るか、誰かに与えられるか、という違いなど、たいしたことではないのです」

フランツ「楽しく躍らせることが、余の使命ということか？」

メッテルニッヒ「その通りでございます。しかしながら、甘やかすばかりではなりませんぞ」

フランツ「時にはムチも、ということか？」

メッテルニッヒ「陛下が発せられた戒厳令は、効果的なムチでした。これから夢を与えるのが、誰か？ということをはっきり示された」

フランツ「手綱を徐々に緩めていけと…」

メッテルニッヒ「その通りでございます」

フランツ「シュトラウスという男も使えそうか？」

メッテルニッヒ「ランナーも初代も死んだ今、ワルツ王の名をほしいままにしておりますし、陛下に忠臣を誓うと申し出ておりますから、十分お役に立つかと」

フランツ「では、宮廷舞踏音楽監督に」

メッテルニッヒ「いえ、彼は革命軍に加担したことがありますし、ここは暫くじらした方が…」

フランツ「さすが、ヨーロッパの戦略家と言われたメッテルニッヒだ。これからも、余を助けてくれるな」

メッテルニッヒ「いえ、私も齢80になります。今宵は祖国に呼び戻していただいたお礼とし

て、最後のご奉公と思っておりますから…」
フランツ「そう言わずに、また訪ねてくれ」
メッテルニッヒ「お言葉はありがたく」
暗転。

第二幕 第二場 1853年2月18日 ウィーン城壁 ヨハン 27歳

T 皇帝フランツ・ヨーゼフ1世は、副官オドネル伯爵を伴って、散歩中、ブルク稜舗の上から軍事訓練の様子を眺めていた。

下手から短剣を振り上げたリベーンが現れる。近くにいた女性が悲鳴を上げる。その声に振り返った皇帝の胸を短剣が突き刺す。副官はサーベルを抜いて第二の攻撃を退け、背後から肉屋のヨーゼフが組みつき、引き倒す。

フランツ「その男を傷つけるな！殺してはならない！」

暗転。

スポットに浮かび上がるマクシミリアン大公 (21)

大公「親愛なる我がオーストリア国民諸君！我が敬愛する皇帝は、一時は失明の危機にさらされながら、神のご加護のもと見事に回復された。余は、偉大なる兄の全快を祝して、新たな教会の建立を果たそうと思う。諸君、心からの賛同を！」

大歓声。

T 皇帝の弟であるマクシミリアン大公のこの呼びかけに、30万人の市民が応じ、ヴォティーフ教会が完成、ヨハンは、行進曲を捧げた。

ヴォティーフ教会の映像をバックに

♪ 皇帝フランツ・ヨーゼフ1世救命祝賀行進曲

幕間②

アデーレとエディ登場。

アデーレ「この暗殺未遂事件で、皇帝の親しみが増したのよね」

エディ「傷が完全にいえるまでには一年近くかかったようだけどね」

アデーレ「そして、皇帝はこの年の8月16日、ウィーンとミュンヘンのほぼ中間にある避暑地のバート・イシュルで、バイエルン公家の公女、ヘレーネとお見合いしたの」

エディ「でも、皇帝が目をつけたのは15歳の妹エリザベートだったんだ」

アデーレ「お母様のゾフィー大公は、ヘレーネを押してたんだけど、いつもはお母様の言う事を聞く良い子のフランツが、この時ばかりはわがママを押し通して、妹の方と婚約してしまったの」

エディ「二人ともゾフィー大公の妹の娘なんだから、どっちでもよかったんじゃないの？」

アデーレ「それが違うの。長女のヘレーネは、それなりの家に嫁がせるってことで、淑女としての教育を受けてたんだけど、シシイって呼ばれてた妹のエリザベートは、自由主義者だった父親の影響が大きくて、自由奔放に育ってたから、勉強嫌いでお后教育にもそっぽを向いてた」

エディ「でも、この時ハンガリーの血を引くマイラット伯爵から受けた共和制のすばらし

さについての講義はシシイの心に残った」

アデーレ「ちょうどその頃、お兄様は、過労で倒れたのよね」

エディ「少し前だ。兄貴は、親父が予想した通り、朝から晩まで取りつかれたように音楽と取り組んでた」

アデーレ「目が覚めるとすぐに新たな曲を作り、午後は、楽団と練習、そのまま演奏会場へなだれ込んで、一晩中、バイオリンを弾きながら指揮をして、倒れこむようにベッドに入っても眠れるのは、数時間」

エディ「倒れない方がどうかしてる」

アデーレ「やってきた医者とは、少なくとも二か月の休養が必要だって告げたの。

シュトラウス楽団から、二か月もヨハンが抜ければ、それはもうシュトラウス楽団ではなくなってしまう」

エディ「それで、当時紡績会社で街路掃除機の研究をしていたヨーゼフ兄さんが呼ばれたんだ」

第三幕 第一場 1853年6月某日 シュトラウス家 ヨハン 27歳

アンナの前でうなだれているヨーゼフ (26)

ヨーゼフ「僕が開発したマシンは今、その採用の是非を巡ってウィーン市議会が検討をしているんです。技師として、キャリアを積む大事な時期なんです」

アンナ「でもヨーゼフ、ウィーンの人には掃除機よりもワルツを求めているの」

ヨーゼフ「そうかもしれない。でも僕は、正式に音楽を学んだわけでもないし、そもそも人前に出るのは苦手なんです。その僕に、指揮なんて…」

アンナ「ヨーゼフ。兄さんが医者から何と言われたか知ってるかい？このままの生活を続ければ、死んでしまう、そう言われたんだ。もし、そうなったら、誰がこの一家を支えてくれるんだい？この母と二人の妹、そして、エドゥアルト、四人全部の面倒を掃除機が見てくれるっていうのかい？」

ヨーゼフ「二か月、二か月で兄さんは戻ってくるんですね」

アンナ「そう。たった二か月。そうすれば、お前はまた、掃除機の世界に戻れるんだ」

ヨーゼフ「わかりました。でも二か月だけ、兄さんが回復するまでですからね」

暗転

T 7月23日、初めて指揮棒を振ったヨーゼフには万雷の拍手が贈られ、一月後、今度は自作を披露することになった。

第三幕 第二場 1853年9月某日 ダンスホール・シュペール ヨハン27歳

♪ワルツ 最初で最後 Die Ersten und Letzten Walzer

センターに指揮棒を持ったヨーゼフ、万雷の拍手に応える。

上手から、アンナ登場。

ヨーゼフ「母さん、兄さんが帰って来たんですね。これで僕は…」

アンナ「それがね、ヨーゼフ。戒厳令が解かれて、ダンスホールが増えたんだ」

ヨーゼフ「兄さんが頑張れば…」

アンナ「無理をさせてまた倒れたらどうするんだい？それに楽団はいくつにも分けられるけど、指揮者が一人じゃね」

ヨーゼフ「約束は約束です。僕は技師の仕事に戻ります」

ヨーゼフ、下手へ 一人取り残されるアンナ。

暗転

T ヨハンの復帰は3千人の聴衆に熱狂的に迎えられたが、半年もたたずに長兄は再び病に倒れた。

スポットに浮かび上がるヨーゼフ。

ヨーゼフ「兄さん、今度引き受ければ、もう二度と技師の仕事には戻れないでしょう。

これも運命なのかもしれません。もし、そうなら、生涯を全うする仕事として、取り組もうと思います。新たな曲と共に」

♪ 最期の後の最初のワルツ Die Ersten nach den Letzten Walzer

幕間③

アデーレとエドゥアルト登場。

エディ「ヨーゼフ兄さんも母さんにとりこまれたってことなんだな」

アデーレ「そうね。お母様はシュトラウスブランドの優秀な経営者だったの」

エディ「ヨハン兄さんも躍らされてたっていうのかい？」

アデーレ「もし、お母様がいなければ、功績の半分も残せていなかったかもしれないわね」

エディ「世紀末っていう時代もマッチしてたんだろうな」

アデーレ「戒厳令を解いた皇帝は、バイエルンから愛らしい花嫁を迎える」

エディ「確か兄さんは、婚礼祝典舞踏会で指揮したんだったよね」

アデーレ「皇帝もヨハンの人気にあやかった一人といえそうね」

エディ「ヨーロッパの美貌といわれたシシィを娶った皇帝の人気はうなぎのぼり、そこへ兄貴が花を添えたってわけだ」

第四幕 第一場 婚礼舞踏会 1854年4月 ホーンプルグ宮殿 ヨハン29歳

♪ ワルツ 舞踏会の物語 Ballg'schichten

音楽に合わせて正装で踊る男女。最後に皇帝と妃が現れ、拍手で祝われる。

第四幕 第二場 1855年某月某日 サンクト・ペテルブルグ

ツアール・スコエ・セーロ鉄道会社本社 重役室 ヨハン 29歳

重役1「このシュトラウスというのは、あのシュトラウスの息子なんだな」

重役2「はい。現在、父を凌ぐワルツの王と称えられ、ウィーンのダンスホールで自らの名を冠する三つの楽団を率いております」

重役1「一人でかね」

重役2「弟が二人おりまして、次男のヨーゼフはその才能も評価されておりますし、三男のエドゥアルトもハープ奏者を経て、今は指揮も始めております」

重役1「夏の三ヶ月をハバロフスクで過ごしても問題はないということか？」

重役2「父親が提示しながら、結局契約にはいたらなかった条件を全て飲むということで、了承を得ております」

重役1「集客は見込めるなろうな」

重役2「父親の代からの名声はこのロシアにも既に広がっております。自らヴァイオリンを奏でながらの指揮振りにも人気があり、更に独特の演出を凝らした演奏会を既に何度も成功させております。皇帝のいらっしゃる間は毎晩コンサートをすると思っておりますし、プログラムによりますと、彼の作品ばかりでなく、ワーグナー、メンデルスゾーン、ヴェルディの曲も取り入れております」

重役1「成功すれば継続もあり、ということだな」

重役2「はい。他のどの音楽家よりも多くの観客を集めることは確実です」

第四幕 第三場 ハバロフスク 1856年8月2日 楽長ヨハン・シュトラウスのための盛大な音楽の夕べ ヨハン30歳

♪法律家舞踏会 Juristenball-Tanzeに合わせて 花火を中心とした映像展開。

センターでスポットに浮かび上がったヨハンに盛大な拍手が贈られる。

T ヨハンと鉄道会社の思惑通り、ハバロフスクでの成功はその後10年間も続き、ヨハンに莫大な報酬をもたらした。そして、三年後、1859年の夏には…

第四幕 第四場 ハバロフスク 1859年7月某日 ヨハン33歳

一人たたずんでいるオルガ(36)のもとへ上手から走りよってくるヨハン。

ヨハン「遅れてすまない。リハーサルから抜けられなくて」

オルガ「気になさらないで、お忙しいのは承知していますから」

ヨハン「オルガ、僕は僕自身が情けない。少しでも長く、君と二人で過ごしたいと思っているのに、つまらないしがらみから抜けられないなんて」

オルガ「ヨハン、そう言うってくれるだけで十分ですわ」

ヨハン「信じてもらえないかもしれないけど、この歳になるまで、僕は、こんなに人を愛したことはないんだ。19の時から、楽団を率い、来る日も来る日も仕事に追われ続けてた」

オルガ「ご自分の時間がなかったのね」

ヨハン「なかった。でも、もしあったとしても、今考えると、自分が何をしたかったのか、それも判らないんだ」

オルガ「今は…判るの？」

ヨハン「もちろんだ。今、すぐにでも君と一緒にになりたい。オルガ、結婚してくれ」

オルガ「！」

暗転

幕間④

アデーレとエディ登場。

エディ「姉さん、これはないんじゃないの？」

アデーレ「何が？ヨハンの初めての恋よ」

エディ「だったら、もう少しちゃんと教えてくれよ。いったい二人はどこで、どういう風に知り合ったんだ？」

アデーレ「細かいことはいいじゃない。どうせ、この二人、オルガの両親の反対にあって結ばれないんだから」

エディ「1998年に出されたフランツ・エンドラーさんの本では、オルガが実在したことは認めてるけど、二人の恋バナは、姉さんの丁稚上げじゃないかって疑ってるよ」

アデーレ「失礼な男ね」

エディ「フランツさんは、兄さんが、四年目に叔母さんがハバロフスクについていってお金の管理をするまで、ロシアで稼いだお金を派手に使い切ってたってことしか、わからないって言ってる」

アデーレ「30代の健康な男が、母親のくびきから離れて、三ヶ月も異国で過ごしてたのよ。恋バナの一つや二つ、あっても不思議はないでしょ」

エディ「それはそうだ。でもこのオルガとの話は姉さんが、手に入れたって言ってる兄さんからオルガに宛てた手紙だけなんだろう？」

アデーレ「君の両親が反対だからといって、それほど落ち込まなくてもいいよ。僕は陽気な君が好きなんだ」

エディ「7月17日の手紙だね。でも、その手紙のオリジナルもコピーもどこにも残ってないんだ。あるのは、姉さんがチェックして印刷され、出版されたものだけだってフランツさんは言ってる」

アデーレ「だからって、ヨハンがこの時期に浮名を流さなかったってことにはならないでしょ？」

エディ「でも兄さんたちは、ハバロフスクで149日間、一日も休まずに400もの楽曲を演奏してたんだ。しかもその149日の内、兄さんが指揮しなかったのはたったの8日だけ。練習にもすべて立ち会ってた」

アデーレ「それじゃ、あの莫大な報酬はどこへ消えたっていうの？」

エディ「新たに知り合ったハイソな貴族や友人と飲んで食べて、たまには一時の享楽を楽しんだかもしれない。でもそれだけだったのさ。真剣な恋をするほど暇じゃなかったはずだ。姉さん、姉さんはなぜ、オルガとの話にこだわったんだ？」

アデーレ「私は、ヨハンが普通の男として、普通の女性と恋に落ちたことを残しておきたかったの」

エディ「！」

アデーレ「あなたはもう気づいてると思うけど、私も、最初の奥様、イエッティもオルガとは違うの」

エディ「母さんの…、代わりだったんだね」

アデーレ「そうよ。ヨハンが求めていたのは、彼の才能を信じ、その行く先を示してくれる女性。イエッティは、お母様がその力を弱めていた丁度その時に現れたの」

第五幕 第一場 イエッティのサロン 1862年3月某日 ヨハン 36歳
アリアを歌い上げるイエッティ (43)
万雷の拍手を受ける

第五幕 第二場 イエッティの私室 その夜

イエッティの膝に横たわっているヨハン。
イエッティ「お疲れなのね」
ヨハン「確かに疲れてはいる。イエッティ、でもこうして、君といると、その疲れまでもが愛おしくなる」
イエッティ「あなたに必要なのは、ゆっくりと流れる時間」
ヨハン「ゆっくりと流れる？」
イエッティ「そう。あなたは今まで、あなたの人生を全速力で駆け抜けてきた。そうじゃなくて？」
ヨハン「無我夢中だった…」
イエッティ「私、はっきりと覚えてるの。あなたを初めて見た時のこと」
ヨハン「！」
イエッティ「一年くらい前ね。あなたは、オーケストラの前で指揮棒を振ってらした」
ヨハン「いつものことだ」
イエッティ「そうね、他の人にはあなたの熱心さは情熱的に写ったのかもしれない。でも私には違って見えたの」
ヨハン「違ってた？」
イエッティ「その時はちょっとした違和感だった。でも、その後、あなたをサロンに招待して、私を見つめるまなざしを見た時、その違和感がどんなものだったか、わかったの」
ヨハン「あなたは僕の憧れの人だった…」
イエッティ「わかってたわ。自惚れっていわれれば、しょうがないけど、私への思いがまっすぐに届いてたの。それが、演奏している時のあなたとは違ってた。指揮棒を振っている時のあなたは何かに獲り付かれているようだった」
ヨハン「獲りつかれて…」
イエッティ「その後、何度もあなたの演奏を見て確かめたの。あなたは、いつも何かに追い立てられてるようだった」
ヨハン「そんな…ことは…」
イエッティ「私もそうだったの。表舞台に立って、人に認められようと思えば、最初は誰もが、無我夢中になる」
ヨハン「それなら僕も…」
イエッティ「あなたは違うの。私はゼロからスタートしたけど、あなたは最初から注目されてた。私は、一から全てを積み上げて、初めて人から評価された時、何かをやり遂げたような気持ちになったけど、あなたはまだ、走り続けてる」
ヨハン「立ち止まっても…」

イエッティ「いいのよ。19の時から走り続けてきたんですもの」

ヨハン「イエッティ！」

二人、静かに抱き合う。

T その年、ハバロフスクの演奏会を途中からヨーゼフに任せ、ヨハンはウィーンに舞い戻った。

第五幕 第二場 シュテファン大聖堂 1862年8月27日 ヨハン 36歳

ウエディングドレスをまとったイエッティとタキシードのヨハンが、祭壇に立つ。

♪ウィーン年代記 wiener Chronik

幕間⑤

エディとアデーレ登場。

エディ「あの時、ヨーゼフ兄さんは、急に呼び出されたんだ」

アデーレ「ヨハンもイエッティもこの結婚が祝福されるとは思ってなかったでしょうね」

エディ「それはそうだ。あの頃、兄貴はウィーン一の人気者で、花嫁候補は山といたんだ。

それなのになんで、七つも年上で、ついこの間まで、銀行家の愛人だった女を選ばなきゃいけない！」

アデーレ「ヨハンが求めていたのはお母様の代わりに自分を導いてくれる人だったの。

自身が歌手だったイエッティは、お母様以上にヨハンの才能を理解し、芸術上の相談相手で、やり手のマネージャーで、秘書でもあり、やさしい看護婦でもあったの。

彼女はあなたやヨーゼフの仕事も整理したはずよ」

エディ「確かに彼女がやりくりするようになって、仕事は前よりスムーズに回るようになった」

アデーレ「それまで、必死でシュトラウスの名前を守ってきたお母様の負担もだいぶ減ったはずよ」

エディ「60過ぎてたからな。ほっとしてたのは事実だ」

アデーレ「イエッティは、シュトラウス楽団を3つに分けて、ドイツやハンガリーにも派遣して、シュトラウスの曲と名前を浸透させていった」

エディ「でも、ヨハンが指揮をする回数は減っていった」

アデーレ「それもイエッティの考えよ。観客が楽団に望んでいることを正確に知ってたのね」

エディ「演奏じゃないのか？」

アデーレ「新曲よ。観客は常に新しい曲を求めるの。ヨハンが、作曲に集中して、うまく機会をとらえて、彼自身が新曲を指揮すれば、後は、ヨーゼフとあなたがフォローすればいい」

エディ「確かに兄貴の名声は上がって、結婚の翌年には、念願の宮廷舞踏会音楽監督になった」

アデーレ「イエッティは、次の展開も呼んでたわ。あの頃、パリからオッフェンバックが

やってきて、ウィーンでも彼のオペレッタが人気を博してた」
エディ「そういえば、兄貴はオフエンバックとコンビでジャーナリスト協会に曲を提供してたな」
アデーレ「ヨハンが「朝刊」オフエンバックが「夕刊」ワルツとオペレッタの両方の王様が共演したってとこね」
エディ「イエッティはあの頃から、ヨハンにオペレッタを作らせようとしてたのか？」
アデーレ「エディ、シュトラウス家の財政を支えてたのが何かは知ってるわよね」
エディ「ハバロフスクでの演奏と楽譜の売り上げだろ？」
アデーレ「そう。でも楽譜は、一度売ってしまえば、その後、どんなに売れようが、追加のお金はもらえなかったの。演奏会も実入りは良かったけど、5か月近くの労働ってことを考えると、不労所得ではないわよね」
エディ「オペレッタは違うんだな」
アデーレ「楽譜を売る出版社からの収入は変わらないけど、オペレッタは上演するたびに、その収入の一部が作曲者に払われるようになってた」
エディ「自分たちで演奏しなくても、お金が入るってことだね」
アデーレ「そう。このシステムの違いに気づいたのがイエッティ」
エディ「それにあの頃、兄貴は出版者のハスリンガーともめてた」

第六幕 第一場 シュトラウス家 1864年 2月 ヨハン 38歳

立ち机に向かっているヨハン。下手からイエッティ。
イエッティ「ヨハン、アスリンガーがまた、ツイーラーの曲を出したわ」
ヨハン「どうせまた師匠のハーゼルが手を入れてるんだろ。」
ろくにオーケストレーションもできないようなツイーラーの曲が、当たるはずもない」
イエッティ「そうかもしれないけど、ハスリンガーの反乱よ。あからさまにあなたのライバルを作ろうとしてる」
ヨハン「ツイーラーが僕のライバルになると思っているなら心外だな」
イエッティ「ダンス音楽の作曲家としては確かに力不足ね。でも、もっと手ごろな軍楽隊のものなら、納得できるところもあるわ」
ヨハン「通りでパレードする連中の音楽か」
イエッティ「そうよ。皇帝が実行したリング道路がもうすぐ完成する。つまり、パレードの舞台が整うってことじゃない？」
ヨハン「君は僕に軍楽隊用の曲を書けって言うのかい？」
イエッティ「そんな必要はないわ。あなたがわざわざ階段を下りるなんて意味ない。あなたは階段を昇るの。ハスリンガーでなくてもあなたの楽譜を売ることはできる。出版社を代えればいいだけのこと」
ヨハン「僕は今まで通りでいいんだね」
イエッティ「そう、できるだけ作曲に専念して」
ヨハン「イエッティ、君無しでは僕は何をすべきかもわからない赤ん坊だ」
イエッティ「赤ん坊には、あなたのような曲を作れないわ」

第六幕 第二場 ホーンブルグ宮殿 皇帝執務室 1866年10月 ヨハン41歳

T ケーニヒグレーツの戦いでプロイセンに大敗し、ドイツ統一から排除された

オーストリアは、領土の多くを失い、ハンガリーの独立をも迫られていた。

机に向かっているフランツ。下手からシシイ登場。

シシイ「なぜに血を流し、苦しみながら正しい者が十字架の重荷を引きずっているのに悪人が幸福な勝利者として馬にまたがって行くのだろう」

フランツ「ハイネだね。君が、お気に入りの詩人の言葉で慰めてくれるとは…」

シシイ「弱っているオーストリアに付け込んで、身勝手に振舞ったビスマルクが気に入らないだけよ」

フランツ「戦略家としては正しい判断だと思うがね」

シシイ「あなたはこの国の指導者としては変人ね」

フランツ「ヨーロッパの美人を妻にしている幸福な男のどこが変わっているんだ？」

シシイ「この国が大きくなったのは、戦争に強かったからじゃないのはご存知よね」

フランツ「多くの娘を嫁にして送り出し、その血縁で、領土を広げてきた」

シシイ「そう。ナポレオンが現れて、その伝統を崩しかけたけど、危ういところでハプスブルグの栄光は保たれた。お母様があなたに望まれたのは、第二のマリア・テレジアのはずよ。それなのにあなたは、自分の嫁に一番ふさわしくない私を選んだ」

フランツ「君は立派に跡継ぎを生んだじゃないか？」

シシイ「跡継ぎだけじゃだめなの。この国に必要なのはたくさんの王女」

フランツ「今からでも遅くはないと思うんだが」

シシイ「申し訳ないけど、それは無理。自分で言うのも変だけど、あなたは私を自由にさせすぎたの」

フランツ「それは君を愛しているから…」

シシイ「あなたはとても誠実だわ。男としてはね」

フランツ「それはいけないことかな？」

シシイ「あなたは男であると同時に、皇帝なの。皇帝はその妻を、愛する女としてだけでなく、お妃として扱うべきだったのよ」

フランツ「そうかもしれない。でもそうはしなかった」

シシイ「なぜ？お母様はもちろん、この国の人みんながそれを望んでたのよ。私が今、疎んじられてるのがいい証拠だわ」

フランツ「君がそのことで、苦しんでいるのなら謝る」

シシイ「まったく気にならないって言ったら嘘になるけど、嫌われてるほうが自由になんでもできるのも事実だわ。独立を望んでるハンガリーでは人気もあるしね」

フランツ「実は、今度の戦争で気づいたことがある」

シシイ「何に？」

フランツ「自分に託された役割だ」

シシイ「ハプスブルグの栄光を取り戻すことでしょ？」

フランツ「少し違うな。ナポレオンが火をつけ、イギリスの産業革命が推し進めようとしている大きな流れを私一人で止めることなどできない」

シシイ「このまま国が減びるのを見守るだけ？」

フランツ「全てを失うことはないだろう。私の使命はこの国の、ハプスブルグの栄光を辱めずに閉じることだと思う」

シシイ「どうやって？」

フランツ「リング通りに沿って、今、様々なものが作られている」

シシイ「私の贅沢と並んで税金の無駄遣いって言われてるわ」

フランツ「使われてるのは税金だけじゃない。裕福になった市民といわれる階層がそれぞれの富を競い合うように城のような邸宅を作ってる」

シシイ「栄光を形にして残そうとしてるのね」

フランツ「ハプスブルグが育ててきたのは、軍隊じゃない。あのマリー・アントワネットがフランスに伝えたのは文化だ。モーツアルトを生み、ベートーベンとシューベルトを育て、今、シュトラウスが世界を席卷しようとしている。私はウィーンそのものを遺産として残そうと思う。そのために破産しても構わない。そして、その文化の一つが、シシイ、君なんだ」

シシイ「あなた…」

幕間⑥

エディとアデーレ登場。

エディ「皇帝は、自分たちの時代の終焉を予感してたんだな」

アデーレ「そして翌年の3月2日、オーストリア第二の国家ともいわれるようになったあの曲が披露されたの」

第7幕 第一場 ウィーン楽友協会 1867年3月2日 ヨハン 41歳

ウィーン男性合唱団が歌う。

♪美しく青きドナウ

Donau so blau,
Durch Tal und Au
Wogst ruhig du hin,
Dich grüßt unser Wien
Dein silbernes Band
Knüpft Land an Land,
Und fröhliche Herzen schlagen
An deinem schönen Strand.

春美しきドナウの流れ
谷を渡り野を越えて
穏やかに流れる河に
我がウィーンはひざまずく
君の銀色のリボン
国と国とを結び
人の心を弾ませる
その美しい岸辺で

Weit vom Schwarzwald her
Eilst du hin zum Meer,
Spendest Segen Allerwege
Ostwärts geht dein Lauf,
Nimmst viel Brüder auf:

遠い黒い森から
君は海へ急ぎ
恵みを与え
東へ向かい
多くの兄弟が

Bild der Einigkeit für alle Zeit.

時代の団結を仰ぎもって

Alte Burgen seh'n nieder von den Höh'n,
Grüßen gerne dich von ferne
Und der Berge Kranz,
Hell vom Morgenglanz
Spiegelt sich in deiner Wellen Tanz.

古い城が高みから見下ろし
遠くから君にあいさつ
そして山々は
朝日に輝き
踊る波に写る

Die Nixen auf dem Grund,
Die geben's flüsternd kund
Was alles du erschaut,
Seit dem über dir der Himmel blaut.

水底の妖精は
囁き知らせる
君が聞いたすべてを
青空の下で

Drum schon in alter Zeit
Ward dir manch' Lied geweiht,
Und mit dem hellsten Klang
Preist immer auf's Neu' dich unser Sang.

ある歌が
それゆえ昔からある
輝ける響きをもって
歌はまた君を称える

Halt an deine Fluten bei Wien,
Es liebt dich ja so sehr
Du findest, wohin du magst zieh'n,
Ein zweites Wien nicht mehr.

ウィーンで止まれ
君を最も愛している地だ
ここ以外どこにも
ウィーンはない

Hier quillt aus voller Brust
Der Zauber heit' rer Lust,
Und treuer deutscher Sinn
Streut aus seine Saat von hier weithin.

胸からあふれ出る
明るく喜びに満ちた魔法が
そして、忠実な祖国の心が
ここから世界へ巻かれるのだ

Du kennst wohl gut deinen Bruder, den Rhein
An seinen Ufern wächst herrlicher Wein,
Dort auch steht bei Tag und bei Nacht,
Die feste treue Wacht.

君のよく知るラインの流れ
その岸では素晴らしいワインが育つ
昼も夜も
忠実な見張りに見守られ

Doch neid' ihm nicht jene himmlische Gab'
Bei dir auch strömt reicher Segen herab,
Und es schützt die tapfere Hand
Auch unser Heimatland.

けれど、うらやむことはない
君にも豊かな恵みが降り注ぎ
勇敢な手が守ってくれう
祖国と共に

D'rum laßt uns einig sein,
Schließt Brüder fest den Reig'n,
Froh auch in trüber Zeit,
Mut, wenn Gefahr uns dräut!

一つになろう
皆を輪舞に加え
重苦しい時代も明るく
危機を乗り越え

Heimat am Donaustrand,
Bist uns'rer Herzen Band;
Dir sei für alle Zeit
Gut und Blut geweiht!

ドナウの流れる故郷は
我が心の絆
君のためなら
何もかも捧げよう

Das Schifflein fährt auf den Wellen so sacht,
Still ist die Nacht, die Liebe nur wacht,
Der Schiffer flüstert der Liebsten ins Ohr,
Daß längst schon sein Herz sie erkor.

小舟は穏やかに進む
夜は静かで愛だけが目を覚ます
船乗りは恋人の耳にささやく
あなたは既に私の心をとらえた

O Himmel sei gnädig dem liebenden Paar,
Schütz' vor Gefahr es immerdar!
Nun fahren dahin sie in seliger Ruh
O Schifflein, fahr immer nur zu!

愛する人に天の憐みを
常にお守りを
この上なく幸せな平穏の中を行く
小舟を見守って

Junges Blut, frischer Mut,
O wie glücklich macht,
Dem vereint ihr lacht!
Lieb und Lust schwellt die Brust,
Hat das Größte in der Welt vollbracht.

若さ 新鮮な勇氣
この幸せを
すべてが一つに
愛と喜びが胸に膨らめば
それは世界一偉大なこと

Nun singst ein fröhliches seliges Lied,
Das wie Jauchzen die Lüfte durchzieht,
Von den Herzen laut wiederklingt
Und ein festes Band um uns schlingt.

いま君はこの上なく幸せな歌を歌い
それは歓喜として 空を舞い
心に大きくこだまし
我らを堅い絆で結ぶ

Frei und treu in Lied und Tat,
Bringt ein Hoch der Wienerstadt,
Die aufs Neu' erstand voller Pracht
Und die Herzen erobert mit Macht.

君の自由と忠実さが
ウイーンに祝杯をもたらす
大きな華やかさを手に
人の心をつかみとる

Und zum Schluß bringt noch einen Gruß
Uns'rer lieben Donau, dem herrlichen Fluß!
Was der Tag uns auch bringen mag

最期にもう一度ひざまずこう
我が愛するドナウ 素晴らしき流れに
君がもたらす

Treu und Einigkeit

忠実と団結に

Soll uns schützen zu jeglicher Zeit

我らを守る 忠実と団結に

Ja Treu und Einigkeit!

我らはひざまずく

幕間⑦

エディ「この曲をこのタイミングで生み出したのはまさに天の配慮だな」

アデーレ「イエッティもヨハンも観客が何を求めているか、ってことをよくわかっていたのよ。戦争に負けて領土を失ってたけど、ウィーンの街が被害に合ったわけじゃなかったでしょ」

エディ「気分を変えることが重要だったんだな」

アデーレ「そう。ヨハンが最も得意な分野だったの」

エディ「結果的に皇帝も救ったわけだ」

アデーレ「それ以上よ。国の威信を保つためにヨハンはさらに利用されたわ。皇帝は翌年パリで開かれた万国博に彼を派遣したの」

エディ「最高のゲストでまさに恰好の客寄せパンダだ」

アデーレ「お膳立ても凝ってたわ。当時オーストリア大使夫人でパリの社交界の花だったメッテルニッヒの孫娘をホステス役にして、大使館を改造してまで舞踏会を開いたの」

エディ「そのままロンドンにも行ったんだよな」

アデーレ「数日前までは、シュトラウスとその魅惑的なワルツはまだ私たちにとって未知のものであった。しかし、たった一夜にして状況は変わってしまった。ワルツ王と彼の音楽はとてつもない人気の的になった」

エディ「確かイギリスの新聞に載った記事だ」

アデーレ「パリとロンドンでの成功はヨハンを文字通り世界的な音楽家に押し上げ、同時にオーストリアの名も高めたの」

エディ「そして、世界中から招待を受けたのに、兄貴はウィーンに帰ってきた」

アデーレ「イエッティの戦略ね。期待を持たせて商品価値を上げたんだわ」

エディ「パリから帰った翌年、ウィーンの森の物語を完成させ、兄弟三人でピチカート・ポルカを作ったのが、その次の年1869年だ」

アデーレ「そして、1870年1月15日、ウィーン楽友協会の黄金の間で開かれた落成記念舞踏会で三人揃って新曲を披露したのよね」

エディ「前の年に宮廷歌劇場もオープンしてて、僕ら兄弟が揃って活躍する舞台が整ったと思ったんだ」

アデーレ「でも2月23日、お母様が…」

エディ「椅子に座ったまま、こと切れていた母さんを見つけたのは、ヨーゼフだった」

アデーレ「三兄弟を育て上げたお母様の死を悼んで、すべてのウィーンの舞踏会が取りやめになった」

エディ「それなのに、ヨハンは、葬儀どころか、家にも寄り付かなかった」

アデーレ「ショックが大きすぎたのよ。イエッティがかなりの部分を支えてたかもしれない

いけど、お母様との45年は、ヨハンにとってかけがえのないものだったのよ」
エディ「だからって、何日も部屋に閉じこもっていいわけはないだろ。ヨハンは長男なんだ」
アデーレ「そうかもしれない。でもイエッティが守ろうとしたものも私にはわかるような気がする」
エディ「それがなんだったにせよ。すべてを取り仕切ったヨーゼフ兄さんの負担を補うほどのものだったのか？」
アデーレ「確かにヨーゼフには荷が重すぎたわね」
エディ「その上、葬儀を終えた後、4月にワルシャワに行かされた。しかも準備の手違いでそこには、本来待っているはずの楽団員が半分もいなかった」
アデーレ「悪いことは重なるものね。急遽、ウィーンから呼んだメンバーとの混成部隊をまとめるのは、大変だった」
エディ「何とか一週間遅れで開幕させたけど、6月1日、自分の新曲を演奏中に…」

センタースポットに浮かび上がるヨーゼフ。突然、舞台下に落ちる。
悲鳴を上げる観衆。

アデーレ「意識を失ったまま、7月半ばにウィーンに戻ったヨーゼフは22日、43歳の誕生日を目前に息を引き取った」
エディ「さすがにこの時はヨハンも残った家族のために手をつくしたけど…」
アデーレ「そして、年末には、お母様と一緒に一家を支えていたペピおばさんも天国に召されたのよね」
エディ「ヨハンは、宮廷舞踏会音楽監督もやめて、楽団の指揮もほとんどしなくなった」
アデーレ「今、思えば、イエッティはこのタイミングを待っていたのかもしれないわ」

第八幕 第一場 シュトラウス家 1871年1月 ヨハン45歳

部屋のあちこちに五線譜とペンを置いて回るイエッティ。その様子を立ち机の横に立ってみているヨハン。
ヨハン「今まで僕が作った声楽の曲は美しく青きドナウだけだ。オペレッタなんて無理だろ」
イエッティ「あなたは、ダンス音楽だけで終わる人じゃないわ。かならずオペレッタもものにできる」
ヨハン「でもワルツをそのまま舞台に乗せたって、オペレッタにはならないだろう？ドラマがいるはずだ」
イエッティ「オッフェン・バックの舞台を見た？」
ヨハン「見事なもんだ。天国と地獄も美しきエレヌも！お客が喜ぶのも無理はない」
イエッティ「でも彼はフランス人よ！ウィーンっ子は自分たちのオペレッタを求めているの」
ヨハン「それならスッペがいるじゃないか」
イエッティ「スッペ！ダルマチア生まれの新参者に何ができるっていうの。」

オフエンバックを下敷きにして、ドイツ語の歌詞にワルツを混ぜてはいるけど、器用なだけよ。断言してもいい、スッペの美しきガラテアもフランツ・シューベルトもいつか忘れ去られる。生粋のウィーン風を貫けるのはヨハン、あなただけなの」
ヨハン「でもストーリーはどうするんだ？」
イエッティ「それについては、劇場の監督と打ち合わせ済みよ。千夜一夜物語の中のアリババの冒険を使うの！さあ、準備は整ったわ。歌詞なんか気にせずに、あなたのメロディを紡いで！」

第八幕 第二場 アン・デア・ウィーン劇場 1871年2月10日

T インディゴと40人の盗賊 初演 ヨハン45歳

♪千夜一夜物語に合わせて、アラビアの衣装で踊るシェヘラザード

幕間⑧

エディ「チケットは完売だったんだよな」

アデーレ「観客にはそこそこ受けたみたいだけど、大成功とまではいかなかったみたいね。

でもウィーン大学のエーリッヒ・シェンク教授は、すでにこの作品で、ヨハンの特徴が出てるって言ってるわ」

エディ「三幕構成で、曲目に番号がついてて、伴奏のないセリフがあるってやつだね」

アデーレ「そして、筋書きは二幕まででほとんど終わってて、第三幕は、短かくて、バレエやワルツを盛り込んで仕上げてる」

エディ「そして、ヨハンは、10万ドルという大金を前払いで受け取って、大西洋を渡ったんだ」

アデーレ「伝説のボストンコンサートね」

エディ「北アメリカ建国100年を祝う式典で、二万人の歌手と演奏者を指揮して10万の観衆を前にしたっていう話か」

アデーレ「数に関しては相当盛った話ね。でもヨハンの後でヴェルディが演奏したのは事実だし、大きな業績だったのは確かよ」

エディ「祖音大旅行の後で、ドイツでブラームスとも知り合った」

アデーレ「ワーグナーと並ぶクラシックの巨匠に認められたのは大きかったでしょうね」

エディ「そこから生まれた自信で、オペレッタに力を入れることができたんだな」

アデーレ「次のローマの謝肉祭で、光を見つけて、ついに蝙蝠に出会うの」

第九幕 第一場 シュトラウス家 1874年2月 ヨハン 48歳

原稿を読んでいるイエッティを不安げに見つめるヨハン。

イエッティ「これは大晦日の夜の出来事なのね」

ヨハン「そうだ。前の年の同じ日に受けた屈辱を晴らそうとする男の話だ」

イエッティ「金持ちのアイゼンシュタインが、税務署のお役人を侮辱したことで、留置されることになって、美人のロザリンドは悲しみに暮れている。でも内心夫の留守に元カレのテノール歌手アルフレードと浮気ができそうだとわくわくしてる」

ヨハン「一見、哀れな亭主だが…」

イエッティ「こっちも悪友ファルケが、留置場へ行く前に女房に内緒でかわいこちゃんが
たくさん集まる夜会に行こうと誘われてこっちもそわそわ」

第九幕 第二場 アン・デア・ウィーン劇場 1874年4月5日 ヨハン48歳

T 最高の物語を得てヨハンがたった42日で完成させたオペレッタこうもりが幕を開けた

T第一幕 第12場 第四曲 三重唱 アイゼンシュタインの屋敷

アイゼンシュタインとロザリンデ、アデーレが踊り、歌う。

ロザリンデ「♪一人になるのね、もう明日から どうこの姿を耐えてゆくの 一人待つ身
のこの切なさを 誰にも言えぬ この苦しさ いつもこしらえて 差し上げる 朝の
食事の相手もない 私一人でいただく 寂しさ 悲しさよ」

アイゼン「♪その悲しさ」

三人「♪悲しさあ 泣き泣きお別れ 泣き泣きお別れ 泣き泣きお別れ 泣き別れよ」

ロザリンデ「♪お昼には水とパンだけを飲み こちらはサラダとステーキなのに 夜とも
なれば ベッドに一人 あまりむごいわ

三人「♪泣き泣きお別れ 泣き泣きお別れ 泣き泣きお別れ 泣き別れよ」

アイゼン「♪泣くのはおよし、気がかりになる」

ロザリンデ「♪気が遠くなりそう」

アイゼン「♪お別れだ」

三人「♪気を落とさず！」

アデーレ「♪また会える日が、すぐにやってくる」

三人「♪また逢う日まで まだ 続くのこの悲しみ あーあ 泣き泣きお別れ 泣き泣き
お別れ 泣き泣きお別れ 泣き別れよ」

幕間⑨

アデーレとエディ登場。

エディ「こうもりは大ヒットを記録した」

アデーレ「最初の年だけで、ウィーンで250回、ミュンヘンで130回、ポーランドで160回、
ハンブルグで170回も上演されたの」

エディ「ヨハンはこのオペレッタで、また頂点に立った」

アデーレ「劇場の主たちは、この機を逃すまいと、ヨハンに次々と新作を依頼した」

エディ「ウィーンのカリヨストロ、メトウーザレム王子、どちらも大したものじゃないが、
観客は喜んで、劇場主もしこたま儲け、本人はフランスから勲章までもらった」

アデーレ「ウィーンのオペレッタ作曲家としては順調な滑り出しだったんだけど、4年後
最強のパートナーを失ってしまうの」

エディ「ずっと前に別れた男との間にできたドラ息子の恐喝めいた手紙が原因だって言わ
れてる」

アデーレ「64歳だったイエッティが亡くなって、ヨハンはまだ引きこもってしまう」

エディ「母さんの時、慰めて庇ってくれたイエッティがいなくなったんだ」

アデーレ「とにかく、彼には誰かが必要だったの。だから、知り合って間もないアンゲリカと7週間で結婚してしまったの」
エディ「アンゲリカは二十歳だった。ほとんど犯罪だ」
アデーレ「確かにヨハンは罪を犯したのかもしれないでもその罪は結局誰も罰しなかったわ」

第10幕 アン・デア・ウィーン劇場 支配人室 1882年 ヨハン56歳

支配人シュタイナーが長椅子に横たわるアンゲリカと熱い抱擁を交わしている。
アンゲリカ「ヨハンの作品で大いに潤っているこのアン・デア・ウィーン劇場の支配人と、その大切な稼ぎ頭の妻である私が、こんなに堂々と昼間から逢引きを重ねてる」
シュタイナー「結構なことじゃないか。彼にとって君がまだ妻であることが重要なんだ」
アンゲリカ「イエッティが亡くなった時はそうだったかもしれない。でもすぐに私が彼女の代わりにはならないことが分かったみたい」
シュタイナー「30歳以上も年の若い魅力的な乙女より、60過ぎたマダムの方が良かったってことかい？」
アンゲリカ「シュタイナー、あなたは私のこと愛してる？」
シュタイナー「もちろんだ。許されるなら、このまま、君をどこかへ連れさりたい」
アンゲリカ「本当に？」
シュタイナー「信じてくれないのかい？こうして、君をこの手で抱く時間が、永遠に続けばいいと、思ってるんだ」
アンゲリカ「うれしい。そんな風に私だけを思ってくれるあなただから、私も愛してるの」
シュタイナー「ヨハンだってそうだろう？」
アンゲリカ「違うわ。彼が私に求めているのは無償の愛」
シュタイナー「情熱的な手紙を書いてたじゃないか？」
アンゲリカ「この世でこれほど強く君を愛することができるのは、君のヨハン以外誰もいない」
シュタイナー「誰もいないんだ」
アンゲリカ「どうしてお前は僕に、あなたを心底愛しているって書いてこないのかな？」
シュタイナー「どうしてだい？」
アンゲリカ「今のは、私が、あなたと一緒にいることを知っていて、その場所に送ってきた手紙に書いてあったのよ」
シュタイナー「覚えてる。ちょっとみじめだな」
アンゲリカ「違うの。これは、私が彼の望んでいる女じゃないって言ってくるの」
シュタイナー「嫉妬の恨み言じゃないのか？」
アンゲリカ「愛情って普通は二人のものよね」
シュタイナー「当然だろ？愛し、愛される関係だ」
アンゲリカ「ヨハンには違うの。イエッティは彼を愛してたけど、ヨハンが愛してたのは、イエッティじゃない」
シュタイナー「誰か別の女ってことか？」

アンゲリカ「違うわ。ヨハンが愛を注いだのは、彼の音楽。そして、そうするヨハンを
イエッティは愛してたの」

シュタイナー「まるで、母親だな」

アンゲリカ「そうよ。ヨハンは私に母親になれって言ってるの」

シュタイナー「なるのかい？」

アンゲリカ「なれないわ。誤解しないでね。私、彼が嫌いだったわけじゃないのよ。年の
差なんか関係なかった。愛してたから結婚したの。でも、妻にはなれても、母親には
なれない」

シュタイナー「アンゲリカ」

アンゲリカ「お願い。私を連れて逃げて。あの人もきっとそれを望んでる」

幕間⑩

エディとアデーレ登場。

アデーレ「アンゲリカは静かに去っていったわ」

エディ「本人はそうだけど、自分の父親は置いて行った」

アデーレ「娘が離婚したのに、父親はヨハン尾家に引っ越してきて、そのまま居ついちゃ
ったのよね」

エディ「まあおとなしくしてたから実害はなかったけど。そして、姉さんが登場する」

アデーレ「突然出てきたみたいと言わないで。私は結婚して最初の夫と死に別れてから、
イエッティともヨハンともご近所で親しくしてたんだから」

エディ「僕が、姉さんの義理のお父様から借金してもいたしね」

アデーレ「とにかく、ヨハンは、連れの娘と一緒に私を家に招いてくれたわ」

エディ「アンゲリカと別れてすぐだったよね」

アデーレ「わかってるでしょ？ヨハンは一人では生きていけないの」

エディ「彼女は夫の完璧な助言者であり、秘書であった。シュトラウスは訪問者との面会
を望まなかったの、これも彼女の仕事となった。そして、そこで、彼女の愛らしさ
が効果を発揮することになった」

アデーレ「それほどではないわ」

エディ「今のは、僕のセリフじゃない。当時の新聞記事だよ。アデーレ、君はイエッティ
の母性とアンゲリカの若さ、美しさを併せ持った理想の妻になったんだ」

アデーレ「ありがとう。でも正式な妻に慣れたのは、少し後よ」

エディ「離婚を認めさせるために、国籍まで変えたんだよね。でもそんなことは、些細な
ことだ。その前にヨハンは、デビュー40周年を祝われて、ウィーン特別市民になり、
翌年、1885年10月24日、ヨハンは姉さんとの合作ともいえる、ジプシー男爵を上演し
た」

第11幕 第一場 アン・デア・ウィーン劇場 1885年10月24日 ヨハン59歳

♪ 喜歌劇 ジプシー男爵より 入場行進曲

曲に合わせて、様々な衣装を着けた登場人物たちが、客席から行進してきて、舞台上に

上がり、整列。

サフィがアリアを披露。

♪ #06 Zigeunerlled

So elend und treu ist keiner
Auf Erden, wie der Zigeuner,
O habet Acht -
Habet Acht -
Vor den Kindern der Nacht!
Wo vom Zigeuner Ihr nur hört,
Wo Zigeunerinnen sind,
Mann - gib Acht auf dein Pferd!
Weib - gib Acht auf dein Kind!
Dschingrah - dschingrah -
Dschingrah - dschingrah -
Die Zigeuner sind da, -
Dschingrah - dschingrah -
Die Zigeuner sind da! -
Flieh' wie du kannst
Und fürchte den Zigeuner
Wo er erscheint,
Ist er ein grimmiger Feind'
Trian - triandavar
Trian - triandavar,
Flieh' wie du kannst
Und fürchte den Zigeuner -
Wo er erscheint,
Da - heija! - kommt er als Feind!

ジプシーの歌

この世にジプシーほど
悲惨で忠実な者はいない
注意しろ
注意しろ
夜の子らに!
ジプシーについて聞いたなら
どこであれジプシー女がいれば
男よ、馬から目を離すな
女よ、子供から目を離すな!
ジングラー、ジングラー
ジングラー、ジングラー
ジプシーがいるぞ!
ジングラー、ジングラー
ジプシーがいるぞ!
出来る限り逃げよ、
ジプシーを恐れるのだ!
ジプシーが現れる所は、どこでも
獰猛な敵だ!
トリアン、トリアンダヴァー
トリアン、トリアンダヴァー
出来る限り逃げよ、
ジプシーを恐れるのだ!
どこであれジプシーは現れると、
そう、ハイヤー! 敵として来るのです

第11幕 第二場 シュトラウス邸 1889年2月 ヨハン63歳

くつろいでいるおヨハンとアデーレ

ヨハン「（読んでいた新聞を伏せて）皇帝夫妻が息子を亡くした」

アデーレ「ルドルフ様が？」

ヨハン「マリー・フォン・ヴェッツエラという女と心中したらしい」

アデーレ「聞いたことのない名前ね」

ヨハン「ルドルフは確か離婚を申請してたよな」

アデーレ「でも教皇からは許可が出なかったはずよ」

ヨハン「死ぬ四日前に、皇帝から、新聞にすっぱ抜かれたドイツ帝国への批判で、かなり怒られたようだ」

アデーレ「それで、心中を？」

ヨハン「前に愛人だったミッツィ・カスパルを心中に誘ったらしいが、断られたようだ」
アデーレ「何故そんなことがわかってるの？」
ヨハン「ミッツィが誘われたことを警察に通報してたんだ」
アデーレ「それで代わりにその娘を」
ヨハン「多分な。シシイはどうしてるんだろう」
アデーレ「手塩にかけた息子が、死を選ぶなんて、どんなにお辛いかな」
ヨハン「それは、皇帝も同じだろう。後継ぎを亡くしたんだ」
アデーレ「あなたはお考えになったことはないの？」
ヨハン「何をだ？」
アデーレ「後継ぎのことよ」
ヨハン「ハハハ！僕の何を継ぐっていうんだい？」
アデーレ「溢れるばかりの才能でしょ？」
ヨハン「仮に僕にそんなものがあるとして、それは、僕が親父から引き継いだってことか？」
アデーレ「全てってわけじゃないでしょうけど」
ヨハン「多分そうだろう。でも僕はおふくろの施してくれた教育のおかげで、どうやら、親父をしのぐことができた」
アデーレ「？」
ヨハン「その僕を抜くのは大変じゃないかな？」
アデーレ「それは、そうかもしれないけど」
ヨハン「エドゥアルトを見るのが辛いんだ」
アデーレ「どうして？」
ヨハン「あいつは僕を越えようとしてる。でも奴にはヨーゼフのような才能はない」
アデーレ「そんなこと…」
ヨハン「わかるさ。親父がなぜ、僕らが音楽家になることを反対したのか、最近になってわかったような気がするんだ」
アデーレ「？」
ヨハン「音楽は、とてつもなく魅力的で、同じように残酷だ。一度その魅力に取りつかれると、逃げることができない」
アデーレ「逃げる？」
ヨハン「どんなにつくしても、完全に報いられることはないんだ。現に僕も今、何とかしてオペラをものにしようとあがいてる」
アデーレ「大丈夫よ。あなたなら」
ヨハン「できるかもしれない。でも今まで、その成功のために大勢が犠牲になった」
アデーレ「お母様もイエッティも喜んで協力したのよ」
ヨハン「ヨーゼフとエドゥアルトは明らかに犠牲者だ」
アデーレ「それは…」
ヨハン「後継ぎを失うのは、確かに悲劇だ。悲しみの深さもわかる。でも継いでもらいたくないものもあるんだ」

第11幕第三番 ケーニヒツバウ ベルリン 1889年10月19日 ヨハン63歳

T ヨハンはドイツとオーストリアの両皇帝が出席する演奏会に、後に「皇帝円舞曲」と呼ばれる「手に手をとって」を作曲し、自ら指揮した」

♪皇帝円舞曲 舞台上で優雅に踊る男女

幕間⑪

エディ、アデーレ登場。

アデーレ「ヨハンも苦しんだのよ」

エディ「それがわからないわけじゃない。でも、一人だけろくな曲を生み出せない三兄弟の一人になってみろ」

アデーレ「それはつらいでしょう。でもヨハンは、指揮者としてのあなたは認めてた」

エディ「おかげさまで、破産だけは免れた」

アデーレ「皮肉を言わないで。私たちは、みんな音楽の女神に獲り付かれた犠牲者だったのかもしれない。あなたは引退できたけど、ヨハンは、最後まで期待されてた」

エディ「オペラは失敗続きだったけどな」

アデーレ「でも、宮廷歌劇場の音楽監督になったマーラーがシンデレラのオペラを依頼してきたの」

エディ「デビュー50周年の記念ってことだろ」

アデーレ「それだけじゃない。誰もがヨハンの実力を評価してたのよ」

エディ「でも、最大の支持者だったブラームスは、先に死んでしまった」

アデーレ「そして、シシイも…」

第12幕 第一場 レマン湖畔 1898年9月10日 ヨハン72歳

シシイ（61）黒衣を纏い、侍女と二人で登場。

シシイ「今日も良い天気ね」

侍女「ええ、シシイ様、船に乗れば、きっと風も心地よいはずですわ」

シシイ「私、なんのために生きているのかしら？」

侍女「！」

シシイ「ルートヴィヒも、お母様も、妹も、ルドルフまで逝ってしまったのよ。なぜ私だけが…」

暴漢が、シシイの心臓をとがったやすりで一突きして、立ち去る。

侍女「なんて失礼な！シシイ様？」

シシイ「大丈夫よ。何かが、胸に…」

侍女「シシイ様！」

シシイ「いいの、このままで、皆が、私を…呼んだの…」

侍女「シシイ様！」

シシイが崩れ落ちる。

第12幕 第二場 宮廷歌劇場 1899年5月22日 ヨハン 73歳

T オペレッタ「こうもり」

上手からヨハン登場し、観客に深く礼をした後、指揮を始める。

♪こうもり 序曲

大きな拍手がヨハンを包み込む。

暗転。

T 12日後、1899年6月3日 風邪をこじらせたヨハンは、永遠の眠りについた。

同じ日、フォルクスガルテンでのシュトラウスの父とランナーの記念碑除幕のために
開かれていたコンサートで、演奏中のオーケストラは沈黙した。

センタースポットに浮かび上がるバイオリニスト。

♪美しく青きドナウ

完

主要参考文献

フランツ・エンドラー著 喜多尾道冬・新井裕訳「ヨハン・シュトラウス

初めて明かされたワルツ王の栄光と波乱の生涯」1999年 音楽の友社

ひのまどか著「ヨハン・シュトラウス 「ワルツ王」の喜びと悲しみ」リブリオ出版
1998年

小宮正安著「ヨハン・シュトラウス」中公新書 2000年

ひのまどか著「ブラームス 「人はみな草のごとく」」1985年 リブリオ出版

